

# 横隈山古墳2

～横隈山古墳公園整備工事に伴う調査～

小郡市文化財調査報告書第351集

2023

小郡市教育委員会

# 横隈山古墳2

～横隈山古墳公園整備工事に伴う調査～

小郡市文化財調査報告書第351集

2023

小郡市教育委員会



## <序 文>

本調査地は、昭和 48 年の横隈山遺跡調査時の第 1 地点にあたり、緑地として保存された横隈山古墳です。平成 24・25 年度には小都市教育委員会によって規模や構造を確認するための調査が行われました。その結果、5 世紀中頃の前方後円墳で、全長 31.9 m、後円部径 20.13 m、前方部 11.77 m、前方部幅 11.16 m 前後の規模とわかっています。

今回は、横隈山古墳公園が福岡県より「土砂災害警戒区域」に指定されており、防災のための公園整備工事に伴い、一部の発掘調査を行いました。

また、公園整備後の令和 3 年 11 月 25 日には、横隈山古墳が小都市指定文化財（史跡）に指定され、恒久的な保存と活用を進めることになりました。

調査の実施にあたりましては、関係諸機関のご理解とご協力をいただきました。記して感謝を申し上げ、序文といたします。

令和 5 年 3 月 31 日

小都市教育委員会 教育長 秋永 晃生

## <例 言>

1. 本書は、令和元年度に行った防災関係の公園施設整備に伴う横隈山古墳調査の記録である。
2. 調査期間は、令和元年 11 月 26 日から 12 月 23 日まで実施した。調査面積は、202.5 m<sup>2</sup>である。
3. 調査は小都市教育委員会文化財課が行い、遺構の実測は山崎頼人、一本賢人が行った。
4. 遺物の洗浄・接合は佐々木智子・永富加奈子・山川清日・牛原真弓が行い、遺物の撮影は（有）システム・レコに委託した。
5. 本書中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第 II 系（世界測地系）に拠る。
6. 本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T. P.）を基準としている。
7. 本書の執筆は第 1 章 1 を柏原孝俊、その他の執筆と編集は山崎頼人が行った。

## <目 次>

第1章 調査に至る経過と組織 .....	1
1. 調査に至る経緯	
2. 調査の経過	
3. 調査組織	
第2章 位置と環境.....	3
第3章 これまでの調査.....	5
1. 昭和 48 年の調査	
2. 平成 24・25 年度調査	
第4章 令和元年度の調査 .....	8
1. 調査の概要	
2. 各トレンチの調査	
第5章 調査成果のまとめ .....	14
1. 既往の調査と今回の調査成果	
2. 周構の有無とテラスについて	
3. 市指定文化財（史跡）の指定について	

## <挿 図・表 目 次>

第1図 横隈山古墳公園土砂災害警戒区域図 (s = 1 / 10,000)
第2図 横隈山古墳周辺遺跡分布図 (s = 1 / 10,000)
第3図 昭和 48 年作成の横隈山古墳測量図 (s = 1 / 400)
第4図 横隈山古墳トレンチ位置図 (s = 1 / 200)
第5図 1・2・A トレンチ土層断面図 (s = 1 / 40)
第6図 7・8 トレンチ（北・南）土層断面図 (s = 1 / 40)
第7図 横隈山古墳墳丘復元図 (s = 1 / 300)

## <図 版 目 次>

図版 1 横隈山古墳公園整備工事図面 (s = 1 / 750) 横隈山古墳整備イメージ図
図版 2 横隈山古墳遠景整備後（現在）（南東から） 横隈山古墳調査時（令和元年度）の航空写真（北東から）
図版 3 トレンチ 1（西から） A トレンチ（東から） トレンチ 2（北から）
図版 4 トレンチ 8 北・南（東から） トレンチ 8 北・南 溝部分（北東から） トレンチ 8 北・南 溝部分掘削状況（東から）
図版 5 横隈山古墳全景（北東から） 横隈山古墳全景（南南東から） 横隈山古墳全景（上空から）
図版 6 トレンチ 1（南西から） トレンチ 2（北西から） トレンチ 7（北西から）
図版 7 トレンチ 8 出土遺物および横隈山古墳表面採集弥生土器底部片
図版 8 横隈山古墳表面採集埴輪片（表・裏）

## 第1章 調査に至る経過と組織

### 1. 調査に至る経緯

横隈山古墳は、「みくに野東団地」造成に伴って昭和48年3月から翌年1月まで三次に渡って実施した横隈山遺跡の発掘調査で確認された前方後円墳である。横隈山古墳を包括する横隈山遺跡は、調査時から弥生時代の集落としての重要性が評価されており、市民による「横隈山遺跡を保存する市民の会」を中心とした遺跡の保存運動の先駆けとしても著名な遺跡でもある。

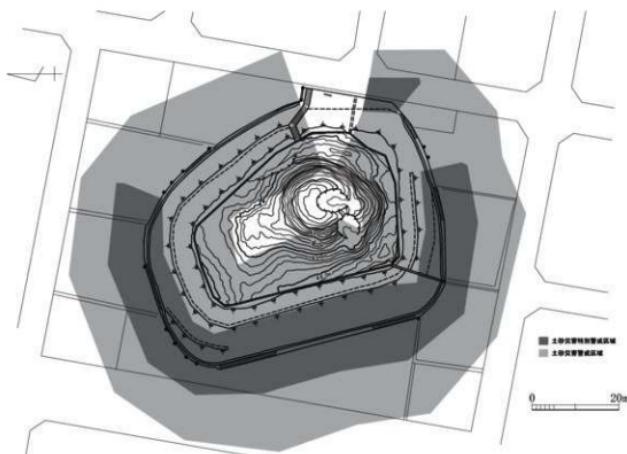
市民による保存運動の高まりを承けて、昭和48年5月22日小都市臨時議会は、「みくに野東団地」造成中に発見された、旧石器時代から弥生時代に至る複合遺跡である横隈山遺跡の全部を「採集経済から生産経済に至る時代の村落形態を探る上で全国的にも最大級の遺跡」として保存することを決議した。

この決議を実現するため、横隈山遺跡を含めた「自然と歴史の公園」をつくりたいと、当時の小都市長と市議会議員及び市民の会は、福岡県に陳情するとともに、上京して遺跡の全面保存のため文化庁へ国指定を要望している。しかし、最終的には遺跡群の最重要部分である1地点の前方後円墳（横隈山古墳）と7地点のV字環溝貯蔵穴群（横隈山遺跡）の2か所のみをそれぞれ古墳公園・遺跡公園として現地保存した経緯がある。とくに横隈山古墳については当時、開発との関係で保存面積を極限まで切り詰めた保存方法であったため、開発優先を象徴した保存形式としてのシンボルとして取り上げられることもあった。

このように、遺跡保存の先駆けともいえる市民による保存運動の結果、残された両遺跡は、開発当時のまま、その後四十数年を経過し、未指定のまま今日を迎えることになる。

横隈山古墳の形状は、道路部分から6～10mの比高差があり、下段はコンクリートブロックの擁壁で囲まれ、上位は切り土のままの台形状をなしており、擁壁上の切土の傾斜角度は30度以上を示している箇所も存在する。この形状から、平成24年に福岡県より「土砂災害防止法」の「傾斜角度30度以上、地上5m以上の基準」に基づき、古墳公園の西側斜面は「土砂災害特別警戒区域」に、その他全域は「土砂災害警戒区域」に指定される結果となった。

古墳公園の現況は、公園施設である側溝の劣化や破損によって、排水機能が著しく低下し、雨水や土砂の流出が周辺の住宅地まで及び、高木として繁殖した雑木等の根が墳丘の一部に及んでいる。また、密集した雑木や高木の落葉・樹木枝の飛散によって周辺住宅への落葉の影響や枝飛散の危険性など環境悪化も指摘さ



第1図 横隈山古墳公園土砂災害警戒区域図 (S=1/10,000)

れていた。さらに、「土砂災害特別警戒区域」及び「土砂災害警戒区域」に指定されたことにより、公園の維持管理についての問題がますます複雑化することになる。

そこで、市内部で古墳公園の維持、管理について協議がもたれ、将来的に文化財の保存と活用を目指すことを目的に、平成 24 年度より、都市建設部まちづくり推進課より教育部文化財課へ公園の管理が移管されることとなった。

文化財課では、移管後の平成 25 年度に周辺住宅に影響する危険な障害樹木の一部伐採を行い、併せて公園頂部周囲に落ち葉及び樹木枝飛散を防ぐため、仮設の防葉ネットを設置した。これと併行し、未調査であった古墳の規模や構造を明らかにするため、整備、活用を目的とした確認調査も国庫補助事業として実施している。

平成 27 年度には、確認調査の成果をもとに、古墳の保存と活用、周辺の環境保全を踏まえて、公園としての安全な環境保全計画の基本的事項を検討することを目的として、「横隈山古墳公園整備基本構想」を策定した。これを基に、公園整備に係る実施計画を検討することにした。この整備実施計画を進めるため、周辺住民との意見交換会も複数回開催し、安全、安心な公園としての施設改修といった環境整備をはじめ、土砂災害防止法に係る規制の解除が主な要望として挙げられた。

以上の経緯から、市では、安全な住環境を図る側面と文化財保護と活用の観点から横隈山古墳公園の早期な整備が急務であるとし、平成 30 ~ 31 年の 2か年で横隈山古墳公園の整備実施設計業務及び公園施設改修工事を併せて実施することになった。〔柏原孝俊〕

## 2. 調査の経過

調査日誌より抜粋し、調査経過を記す。

- 2019 年 11 月 26 日 作業開始。最初に検出範囲の清掃、 Yunpo の足跡を除去。前の調査のトレーナー 7 とトレーナー 2 を検出。埴輪片、弥生土器片を探集。三国が丘 2 区の区長、シルバー人材センター 2 名が見学へ。  
11 月 28 日 午前中雨。午後からトレーナー 7 検出、トレーナー 2・7 の再掘削。  
11 月 29 日 トレーナー 7 挖削終了。トレーナー 2 挖削継続。  
12 月 3 日 西側検出。  
12 月 5 日 古墳整備の設計変更協議。北側も掘削工事が生じる。  
12 月 6 日 トレーナー 2 の再精査状況を職員間で確認する。  
12 月 10 日 トレーナー 8 の確認、溝の存在を確認。  
12 月 11 日 トレーナー 1 部分は切り株があるので、東側にずらして掘削する。  
前方部北側の A トレーナーとトレーナー 1 では明確な遺構が確認できなかった。  
12 月 16 日 周辺にドローンによる空撮の案内を行う。  
12 月 17 日 空撮準備の清掃を始める。  
12 月 18 日 横隈山古墳の周溝の有無を職員間で検討する。  
12 月 19 日 小都市の発掘調査で初となるドローンによる空撮を実施。  
12 月 20 日 トレーナー養生、埋め戻し。実測。  
12 月 23 日 調査完了。

## 3. 調査組織

### 〔令和元年度調査 令和4年度整理作業〕

小都市教育委員会 教育長 秋永 幸生

教育部長 黒岩 重彦（令和元年度）山下 博文（令和4年度）

文化財課 課長 柏原 孝俊（令和元年度）杉本 岳史（令和4年度）

係長 杉本 岳史（令和元年度）山崎 順人（令和4年度）〔報告書作成〕

技術 山崎 順人（令和元年度）〔調査〕

## 第2章 位置と環境

小郡市は、古代筑後国御原郡と御井郡に属した。北・東は筑前国、西は肥前国に接し、市域の北西丘陵部はこれらの三国境の地域として存在し、「三国丘陵」と呼ばれるにいたる。古代御原郡の範囲はほぼ小郡市の北半部の大半と大刀洗町、一部朝倉市が含まれていた。この御原郡の地勢は、宝満山に源を発し、小郡市を東西に二分し南流して筑後川に注ぐ宝満川があり、宝満川流域は肥沃な冲積地を形成している。宝満川左岸では、東北部に独立して起伏する花立山丘陵（標高130.6 m）がある。古代御原郡内で最高所地点であり、筑後平野内で地理的な指標となっている。そのためか筑前と筑後の国境もこの花立山が起点となり、筑紫神社と結んだ直線的な境界が敷かれる。この花立山の南側一帯には宝満川の各支流によって形成された複合扇状地（低位段丘）が広がる。

一方、宝満川右岸では、背振山地から東へ派生した丘陵地が次第に高度を下げ、丘陵末端部で開析が進行する複雑な地形を呈し、独立丘陵が発達している。この丘陵部は北東部の筑紫野市宮地岳付近と併せて平野が急峻となる「二日市地狹帶」を成し、福岡平野と筑後平野の両平野を結ぶ地域である。丘陵地以南では宝満川やその支流域に見られる扇状台地（中位から低位段丘）が発達する。さらに、これら左岸・右岸の台地以南では、宝満川の冲積作用により沖積低地が発達し、小郡市南部・宝満川下流域では島状に残る自然堤防が散在し、現在でもその自然堤防上に集落が立地し、自然地形にそった散在型の集落形態が看取できる。

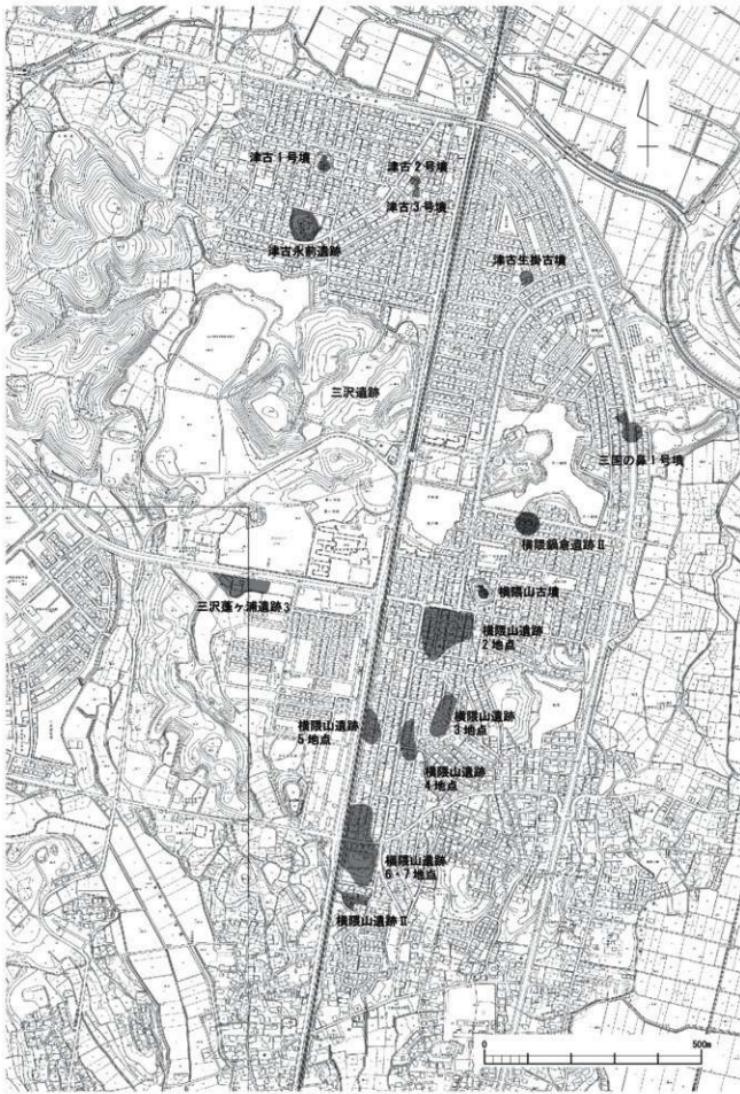
古墳時代前期には、三国丘陵上に津古生掛古墳以降、津古2号墳→津古1号墳→三国の鼻1号墳→花聲2号墳→花聲1号墳と5世紀前半代までの首基墓系列が明らかとなっている（津古2号墳を津古生掛古墳に先行させる見解もある）（第2図）。津古生掛古墳は3世紀後半代の築造と考えられ、全長33 mを測る。南側に長さ5 m程の突出部状の前方部がとりつく。主体部は組み合わせ式木棺で、方格規矩鳥文鏡1面、鉄劍1振、ガラス小玉57個、定角式鉄鎌31本が副葬されていた。昭和43年に調査された津古2号墳は、全長29 mの前方後円墳である。主体部は粘土椁の木棺直葬と考えられ、刀子や小玉が出土したらしいが現地で盗難にあってる。津古1号墳は、2号墳の西側丘陵に近接し、4世紀中頃から後半に築造されたと考えられる全長40.6(+a)mの前方後円墳である。前方部が細くて低く、古式古墳の特徴を持っている。現在は縁地の一部として公園化されて保存されている。その後、全長66 mの小郡市最大の古墳である三国の鼻1号墳が築造される。前方部に2基、後円部に1基の主体部が確認されている。墳頂には二重口縁壺が配置される。ほぼ同時期には宝満川をはさんで焼ノ峠古墳が築造される。全長40.6 mを測る九州最大の前方後方墳である。三国の鼻1号墳に続く首長基系列の候補として挙げられるのが、花聲2号墳である。現状では破壊されており規模は不明であるが、径32 m前後の円墳もしくは前方後円墳と考えられている。三国の鼻1号墳と比べると急激に規模が縮小している。出土遺物には板状の鉄艇や直刃の鉄製鋏先などがあり、築造時期は4世紀後半代に遡る可能性がある。隣接する花聲1号墳は5世紀前半代の築造である。墳丘規模は不明であるが、主体部には竪穴式石室が採用され、副葬品として三角板皮級短甲などが出土している。

その後、若干の空白期を置き、5世紀中頃に横隈山古墳が築かれる。横隈山古墳は、昭和48年に行われた宅地造成に伴い、横隈山遺跡群の発掘調査前に実施された伐採作業中に確認された前方後円墳である。発掘調査によって明らかとなった遺跡の内容に大きな関心がもたられ、市民による保存運動の機運が高まり、第1地点の横隈山古墳、第7地点の弥生時代前期環濠部分が保存されることになった。

5世紀後半には、横隈山古墳の東方1.5 kmで、三沢古墳群の造墓が開始されたと考えられている。まず、19号墳が丘陵尾根部に築造される。真上に18号墳が築造されているため、規模等は不明であるが、主体部に竪穴系横口式石室を採用する円墳である。古墳以外の墓では、横隈鍋倉遺跡IIで竪穴系横口式石室と同様の埋葬方法を有する初期竪穴墓が2基造営される。墓道前底部に土器の供獻がみられるなど、古墳と同様の埋葬方法をとっていたものと思われる。

小郡市周辺における大型古墳は、5世紀後半から6世紀前半代の空白期において6世紀後半から7世紀初めにかけて、彩色装飾古墳である筑紫野市の五郎山古墳、小郡市内では西下野1号墳、線刻による装飾古墳である花立山穴観音古墳が築造される。西下野1号墳は、未調査であるが6世紀中頃から後半の築造と考えられる前方後円墳で、小郡市内では円筒埴輪を最後に採用した古墳である。花立山穴観音古墳は当地域では最大で最後の前方後円墳で、石室構造は複室構造の横穴式石室墳で全長12.3 mを測る巨石古墳の部類に属する。

花立山穴観音古墳が立地する花立山山麓には、小郡市側だけでも300基を超える群集墳が確認されている。



第2図 横瀬山古墳周辺遺跡分布図 ( $S = 1/10,000$ )

### 第3章 これまでの調査

#### 1. 昭和48年の調査

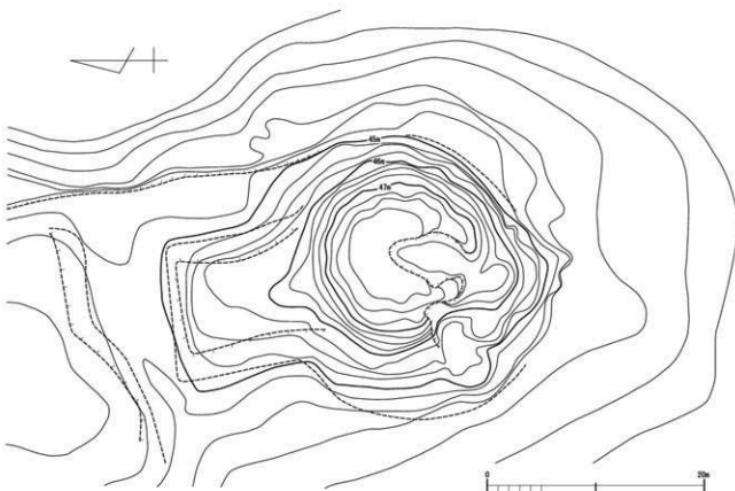
横隈山古墳は、背振山地の東端にあたる丘陵上に存在し、造成地内の北東端に位置している。昭和48年、宅地造成に伴い、横隈山遺跡群の発掘調査前に実施された伐採作業中に発見された前方後円墳である。横隈山遺跡は、横隈山遺跡調査団のメンバーであった久保山教善氏によって、旧石器時代や弥生時代の遺物が採集されており、昭和30年代からすでにその存在が知られていた。

昭和48年3月5日～5月23日に実施された1次調査において、第1地点の前方後円墳の墳丘測量が実施された。

古墳は丘陵頂部に築造され、前方部をほぼ北に向けた前方後円墳である。当時の墳丘測量成果から、「墳丘は前方部の発達が顕著でなく、いわゆる帆立貝式前方後円墳に近い。古墳の築造にあたっては、44.25 m等高線付近から上部の地山が整形されている」と考えられた〔小都市教育委員会 1974『横隈山遺跡』〕。

墳丘の規模は全長約35.6m、前方部幅12.5m、後円部径約26mと考えられた。墳丘は、後円部中央付近より南および西側が盗掘により大きく削り取られ、後円部の南側は原形をかなり壊されている。盗掘坑には、埋葬施設の一部すら認められなかった。墳丘では、埴輪の破片若干が採集され、後円部東側の中腹に円筒埴輪下半部が確認できたが、表土中にあるため原位置を保っているとは断定できない。この円筒埴輪は底部径17.5cm程度で現存部分は突帯が1条めぐらされ、突帯の下部は縦と横向にハケメが交互に施されている。なお、葺石は確認できなかった。当古墳の築造時期であるが、これを判断し得る埋葬施設および副葬品等が確認できなかつたため断定できないが、墳丘の形態から推定すると、5世紀から6世紀のものと考えられる。

参考文献：小都市教育委員会 1974『横隈山遺跡 福岡県小都市三沢所在遺跡の調査概報』



第3図 昭和48年作成の横隈山古墳測量図 (S = 1 / 400)

## 2. 平成 24・25 年度調査

小郡市教育委員会が平成 24 年度に実施した確認調査を第 1 次調査、平成 25 年度に実施した補足調査を第 2 次調査としていて、既に報告を行っている（小郡市教委 2015）。

第 1 次調査では、まず、横隈山古墳の基礎資料として墳丘の詳細測量図を作成した。昭和 48 年には横隈山遺跡調査団によって、測量図が作成されており、往時の横隈山古墳の形状、周辺地形と古墳立地の関係性を確認できる好資料となっている（第 3 図）。昭和 48 年の調査時には樹木が伐採されており、樹木のない状態であったが、40 年の間に樹木が新たに生え、雑草や雑木類も生い茂っていた。低木類や雑草の除去を行い、調査を実施することになる。新たな詳細測量調査を実施した結果、現況での墳丘規模と墳丘形態、擾乱箇所を確認した。この結果、墳丘の形状が推定され、前方部付近に帶状に広がる溝みが確認でき、古墳周溝の可能性が考えられたので調査対象としている。

本確認調査は古墳の墳丘規模、形状、各トレンチから出土した遺物から築造時期を把握することを目的として、必要最小限のトレンチを設定した。

福岡県教育委員会との協議の結果、出土遺物の取り上げは必要最小限とし、原位置を保っている埴輪については取り上げを行わないことにした。

参考文献：小郡市教育委員会 2015『横隈山古墳—福岡県小郡市三沢所在横隈山古墳の調査報告—』

小郡市文化財調査報告書第 289 集

### 第 1 次調査

第 1 次調査では、トレンチ 1・2・3・4・5・6・7・8 を設定し掘削を行った（第 4 図）。

トレンチ 1 は事前に実施した詳細墳丘測量調査の結果から得られた推定墳丘主軸に沿って、墳丘規模、築造方法、周溝の有無を確認することを目的に、後円部墳頂中央付近から前方部方向に長さ 28.4 m、幅 1 m で設定した。

前方部裾部分では、灰黒褐色土の旧表土上に盛土が行われている。前方部裾からは「テラス状の緩やかな傾斜面が 1.38 m ほど広がっており、周溝部へとつながる。トレンチ 1 の北端では周溝が旧表土から掘り込まれたものであることが土層から明らかとなり、墳丘は旧地表上の盛土で、墳丘裾からのびるテラスと周溝は旧地表から地山の削り出しである。前方部側で検出された周溝は幅 7 m」を測ると考えられた。

トレンチ 2 は墳丘主軸方向に直交して設定した後円部墳頂から南西方向へ設定した長さ 15.9 m、幅 1 m のトレンチである。「墳丘はトレンチ 1 で確認されたのと同様に旧地表上に盛土で構築される。（後円部）墳裾から周溝へのびるテラスは水平距離で 1.58 m を測り、墳裾から周溝上端までは弧を描くように地山を削り出し」しており、周溝の「深さは最大 92 cm」を測ると考えられた。

トレンチ 3 は後円部の規模を確認する目的で、長さ 7.37 m、幅 80 cm で設定した。墳裾を切る中世の土坑状の遺構を検出した。また、土坑状遺構の南側には「周溝が検出されるものと考えていたが、硬く締まった明赤橙色を呈する花崗岩ばいらん土が露出したのみ」であった。

トレンチ 4 は前方部の幅および、周溝の広がりを明らかにする目的で、前方部裾付近から北東方向に向けて、墳丘主軸に直交する長さ 5.95 m、幅 1.05 m のトレンチを設定した。墳丘は旧地表土の上に構築され、「墳裾から周溝下端までの深さは最大 55 cm を測る。墳裾から延びるテラスはなく、墳裾から周溝部へ急激な落ち込みがみられる」と考えられた。

トレンチ 5 は前方部裾およびテラス、周溝を確認する目的で、3 × 3 m の調査区を設定した。「北側では、周溝および、前方部から周溝部にかけてひろがるテラス部と考えられる緩やかな落込みが検出され」、「表土直下が墳丘であり、テラス部の埋土は墳丘からの流出土である。また、墳丘盛土が流出したことにより、前方部は土層から前方部裾を確認」している。

トレンチ6はくびれ部の形状を明らかにする目的で、西側くびれ部に長さ5.75m、幅2mのトレンチを設定した。表土の除去と地形変化点のみの確認をした。北西端の墳頂と西側に広がることが想定される周溝を確認するために長さ3m、幅45cmの追加トレンチを設定した。この範囲では周溝は確認できず、緩やかな傾斜を持つテラス部が検出された。

トレンチ7は事前の墳丘測量調査の際、調査区北西端でわずかな痛みが確認できたため、周溝の有無を確認する目的で、長さ7m、幅60cmのトレンチを設定した。第2次調査では後円部裾を確認する目的で後円部側へ4.87m延長している。後円部裾から南西方向へ広がるテラス部を確認した。第2次調査では、後円部裾を確認している。「周溝は前方部のように明瞭な立ち上がりは確認できず、墳丘裾からなだらかな傾斜面を有している」と報告された。

トレンチ8はトレンチ1で検出された周溝の推定延長線上に設定した長さ4.83m、幅65cmのトレンチである。「検出された周溝は、トレンチ西端から2.4m付近が最も深く、基底部の標高は43.45mを測る。第1次調査で明らかにできなかった周溝の範囲を第2次調査でトレンチを拡張し、テラスの拡がりと墳丘側周溝上端の屈曲点を確認」している。

## 第2次調査

第2次調査では、第1次調査で後円部規模が確定できなかつたほか、周溝範囲、埋葬施設の詳細が不明であつたため、第1次調査のトレンチの拡張及び新規のトレンチを3本設定して調査を実施した（第4図）。第2次調査では、新たにトレンチ10・11・12を設定し掘削を行つた（トレンチ9は欠番）。

トレンチ10は第1次調査で不明であった後円部南側に設定した長さ7.3m、幅1mのトレンチである。後円部裾と攪乱による墳丘削平部分を確認した。「墳丘は旧地表上に盛土で構築され、テラスおよび周溝は地山削り出しである。周航南側は調査区外のため、規模は明らかにできなかつた」と報告された。

トレンチ11はトレンチ1周辺の表土除去を行つた際に、墳丘盛土と異なる色調の不明なプランが現れた。埋葬施設の一部である可能性も考えられ、長さ2m、幅30cmのトレンチを設定した。しかし、本トレンチでは木の根による攪乱が著しく、埋葬施設や墓道は確認できなかつた。

トレンチ12は埋葬施設確認のため、後円部東側墳頂部に設定した長さ4.5m、幅85cmのトレンチである。しかし、本トレンチでは埋葬施設、およびその掘方などは確認できなかつた。一方で後円部墳頂付近では埴輪片が多量に出土し、後円部の埴輪列の一部が確認できた。

## 第4章 令和元年度の調査

### 1. 調査の概要

本調査は、先述のとおり、災害対策の公園整備に伴うものである。法面の傾斜角度を緩やかにするための掘削工事では、横限山古墳の北側と西側が削平を伴うため、確認調査を行った。

調査は北側が最大 3.5 m、西側が最大 2.5 m の掘削が計画されたため、まずその範囲の表土除去を行った。北側はこれまでの調査で想定された周溝に影響のない範囲で設定されたが、西側は周溝内部に入っている。次に、この範囲は平成 24・25 年度調査で、古墳周溝や古墳盛土と周溝の間にテラス面が想定された範囲で、既存のトレンチを再掘削し、その状況について確認してから周溝を検出する手順で進めた。トレンチ 2、トレンチ 7、トレンチ 8 は既存トレンチと重なる範囲を掘削し、トレンチ 1 については、既存トレンチ部分が樹木の切株があり根による擾乱が著しい部分であったため、東側にずらしてトレンチを設定した。あわせて、掘削予定範囲内に、A トレンチとして、切株を避けた位置に新しいトレンチを設定した。なお、令和元年度のトレンチ名称は平成 24・25 年度のものを踏襲し、トレンチ 8 については北トレンチ・南トレンチに分け、新たに設定したトレンチはアルファベットを付した。なお、第 4 図では令和元年度調査を赤色で示した。

### 2. 各トレンチの調査

#### トレンチ 1 の調査（第 4・5 図、図版 3・5・6）

トレンチ 1 は当初旧トレンチ 1 に沿う形で設定しようとしたが、切り株が存在するため、若干東にずらして設定した。幅 1 m × 長さ 5.5 m のトレンチである。トレンチ南側では切り株があるので根擾乱が多い。本トレンチ設定箇所は、表土上でも標高が若干下がる部分で、前方部の盛土部分付近から一旦低くなり、北側の端では標高が若干高くなる状況が確認できる。

9 層 (7.5YR5/6 明褐色砂質土) が地山と考えられ、南側では浅い掘り込み (8 層) も確認できる。そのままに、北側では 3 層 (10YR4/6 暗褐色シルト (1 mm 以下砂粒を含む))、南側では 7 層 (10YR5/6 黄褐色粘質シルト (1 mm 以下砂粒を含む)) が堆積している。その上位に堆積するのが、旧表土と考えられる 5 層 (10YR3/3 暗黄褐色土)・6 層 (10YR5/6 にぶい黄褐色土) である。旧表土系の 5・6 層はやや色調に差があるものの、異なる時期に生成された表土と考えている。旧表土の上位にはそれぞれ北側と南側の標高の高い部分から流入したと考えられる 1 層 (10YR5/8 黄褐色土 (サラサラとした土、シルトに近い))・2 層 (10YR5/6 黄褐色粘質シルト) と 4 層 (10YR6/6 明黄褐色粘質シルト) があり、その直上が表土となっている。

これまでの調査で周溝が想定されているが、人為的な掘り込み（周溝）の存在は確認できない。古墳築造以前の地形の緩やかな落ち部分と考えられる。古墳が築造される南側の丘陵頂部と北側の丘陵頂部の間にみられる浅い地形の落ちと判断した。

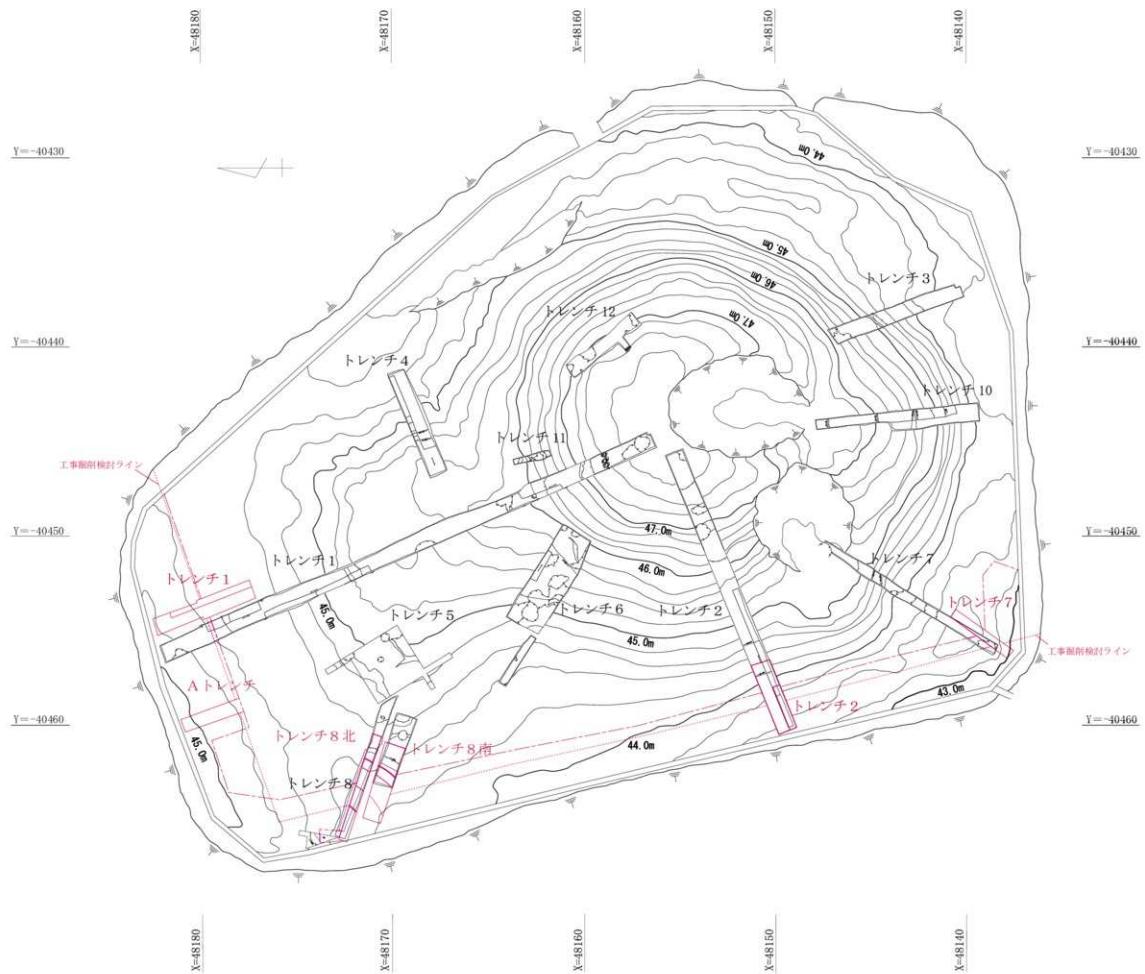
\*平成 24・25 年度調査トレンチ 1 と令和元年度トレンチ 1 の位置にズレが生じている。文化財課内で確認をしたが、平成 24・25 年度調査の測量図とトレンチ位置の合成の際に生じたズレの可能性があるとのことである。実際、令和元年度トレンチ 1 では、平成 24・25 年度埋戻し時の土囊袋を確認しているので、一部は重複しており、第 4 図の大ざなズレではなかったと考えられる。本報告書の図面ではその部分の修正は行わず、既刊の報告書図面と今回の調査トレンチを合成したそのままの状態を掲載している。

#### トレンチ A の調査（第 4・5 図、図版 3・5・5）

トレンチ A は公園整備工事に伴う北側の削平予定部分に設定した 0.6 m × 2.2 m のトレンチである。切り株の影響のない範囲を探したが、それでも根擾乱が多く見られた。3 層 (7.5YR5/6 明褐色砂質土) が地山と考えられ、南に向かってやや下る。1・2 層は北側からの流入土と考えられ、旧表土層はみられない。

#### トレンチ 2 の調査（第 4・5 図、図版 3・5・6）

トレンチ 2 は旧トレンチ 2 西端を踏襲する形で再掘削を行った。幅 1.0 m × 長さ 4.0 m の規模である。地山は 5YR5/6 明赤褐色土である。4 层 (10YR3/1 黒褐色土～10YR4/1 暗灰色土) が旧表土層で、古墳墳丘側では、4 層の上に墳丘側からの流入土である 2 層 (10YR7/6 明褐色粘質土) が堆積している。旧表土は丘陵

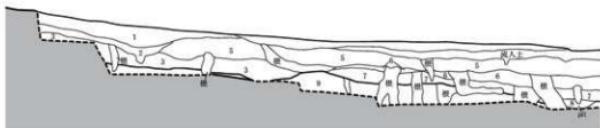


第4図 横隈山古墳トレンチ位置図 ( $s = 1/200$ )

※赤色で示した分が令和元年度の調査

### トレンチ 1

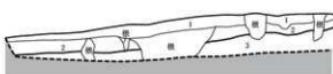
SE 45,000m



- 1 10B5/8 黄褐色土 (テラサラ、シルトに混り)
- 2 10B5/8 黄褐色砂質シルト
- 3 10B4/6 棕色シルト (0mm以下の砂粒含む)
- 4 10B6/6 明黄色褐色粘土シルト
- 5 10B2/3 棕黄色土 (粘土土)
- 6 10B4/6 (2) 棕褐色土 (含み軽石あり)
- 7 10B5/6 黄褐色砂質シルト (1mm以下の砂粒含む)
- 8 10B4/6 棕色シルトと10B4/1 棕灰色シルト
- 9 2. 10B5/6 明黄色砂質土 (地山)

### A トレンチ

SE 45,200m

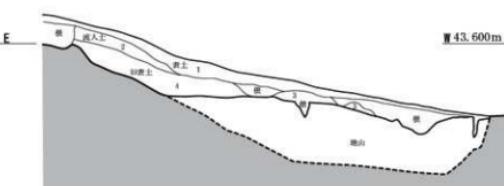


- 1 10B5/8 黄褐色土 (テラサラ、シルトに混り (A トレンチの第1層))
- 2 10B4/6 棕色シルト (1mm以下の砂粒含む) (A トレンチの第3層)
- 3 2. 10B5/6 明黄色砂質土 (地山) (A トレンチの第9層)



### トレンチ 2

SE 43,600m

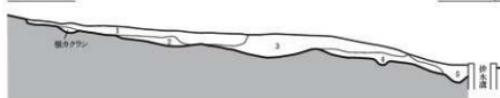


- 1 10B4/1 棕灰色土+5B5/6 布萬色土が層状に入る (削除調査時の剥離出し、ならした土)
- 2 10B7/6 明黄色褐色粘土 (地質)
- 3 2. 5B5/6 明黄色土 (粘土土) (1mm以下の砂粒わずかに含む)
- 4 10B3/1 黑褐色土 (粘土土) ~10B4/1 棕灰色土

第5図 1・2・A トレンチ土層断面図 (S = 1/40)

### トレンチ 7

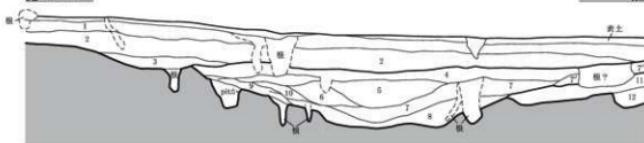
NE 43,600m



- 1 10YR 4/1 暗灰色砂質シルト
  - 2 10YR 6/2 淡黄褐色砂質土 (しまりあり)
  - 3 10YR 7/2 黄褐色砂質土 (10YR 7/明黄褐色砂質土底じる)
  - 4 第2層と同じ
  - 5 第1層と同じ
- ※1が地表段じの扱いカクラン (古い) カクラン・カクハシ層 (表面による?) ブロック土  
1は現表土層に近い、3も新しい組。2は泥入土、4は古い・旧カクラン

### トレンチ 8 北

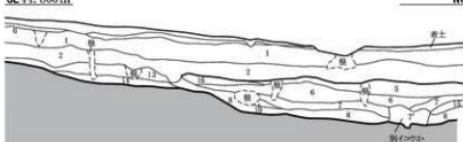
SE 44,600m



- 1 10YR 6/6 明黄褐色粘質シルト (1mm以下砂粒含む)
- 2 10YR 4/2 ぶい・淡褐色土+10YR 3/2暗褐色土 (山表土)
- 3 10YR 4/2 ぶい・淡褐色土 (山表土系)
- 4 10YR 4/暗褐色土 (山表土、表の土層に堆積した山表土)
- 5 10YR 3/2・5/5 暗褐色粘土+7.5YR 1/1 暗灰色土 (上層からのカクランから堆積物 1mm以下少量)
- 6 7.5YR 6/明黄褐色粘質シルト、1mm以下砂粒を含む
- 7 7.5YR 6/5/3 ぶい・暗褐色粘質シルト+部分的に7.5YR 6/1 暗褐色土 (7° 堆積物 1mm以下少量)
- 8 7.5YR 6/暗褐色砂質シルト
- 9 10YR 7/3/1 ぶい・暗褐色砂質土
- 10 7.5YR 4/明黄色砂質シルト
- 11 7.5YR 6/暗褐色シルト (少進化、土硬か?)
- 12 10YR 6/3/1 ぶい・暗褐色粘質シルト、1mm以下の炭化物含む (pHの可能性)

### トレンチ 8 南

SE 44,500m



- 13 10YR 5/8 黄褐色粘質シルト (1mm以下砂粒含む)
- 14 10YR 5/8 黄褐色砂質土 (1mm以下砂粒含む)
- 15 6で灰褐色土を多く含む
- 16 10YR 4/3/1 ぶい・黄褐色シルト (1mm以下砂粒含む)

第6図 7・8トレンチ(北・南) 土壌断面図 (S = 1/40)

の下位側では途切れている。地山の直上に部分的に埴丘側からの流入土と考えられる3層（7.5YR5/6 明褐色土）がみられるほかは、地山の上位には根攢乱や表土がみられる。

平成24・25年度調査で周溝埋土としていた層は今回地山と判断した。

#### トレンチ7の調査（第4・6図、図版5・6）

トレンチ7は旧トレンチ7南西端を踏襲する形で設定した。切り株があつたため、若干南東方向に掘削範囲をずらしている。幅0.6m×長さ3.6mの規模である。地山は10YR7/6 明黄褐色土である。旧表土はみられず、埴丘側からの流入土と考えられる2層（10YR6/2 灰黄褐色土）が地山の上位にみられるが、その他は根攢乱と考えられる層が多くみられた。

#### トレンチ8（北・南）の調査（第4・6図、図版4・5・7）

トレンチ8は旧トレンチ8を踏襲する形で再掘削を行った。トレンチ8北は幅0.6m×長さ6.0m、トレンチ8南は幅1.0m×長さ4.2mのトレンチである。

トレンチ8北では、10YR7/3 花崗岩バイラン土の地山で、旧表土と考えられる2層（10YR4/3にぶい黄褐色土～10YR3/3暗褐色土）・3層（10YR4/3にぶい黄褐色土）・4層（10YR3/4暗褐色土）の直下に人为的な断面逆台形状の溝状の遺構が確認できる。なお、4層は溝状遺構が窪み状に残っている部分、最上層に堆積した旧表土である。溝状遺構の埋土は4～10層で、5層から弥生土器小片が出土している（図版7）。また、溝状遺構以前のピットなど遺構と考えられる土層も確認できた。

旧表土より上位にある1層（10YR6/6 明黄褐色粘質シルト）からは埴輪片が出土している（図版7）。1層は埴丘からの流入土と考えられる。その直上には表土が薄く堆積している。

溝埋土最下層である8層からは弥生時代の所産と考えられる焼土塊が出土している。

トレンチ8南も同様に、旧表土と考えられる2層の下に人为的な断面逆台形状の溝がみられた。西側部分については、上端は検出できていない。旧表土の上位にある1層は北トレンチよりも厚さが増している。1層の直上では表土や平成24・25年度調査時の埋戻土が堆積している。溝状遺構は地形の高い部分では地山の上位に堆積した地山に類似する13層（10YR5/8 黄褐色粘質シルト）・14層（10YR5/8 黄褐色砂質土）を切り込んでいる。

トレンチ8で見られた溝状遺構は旧表土層の下位にあることが確認できる。また、旧表土の上位が古墳時代相当層で、旧表土上に古墳盛土が行われ、旧表土上に埴丘からの流入土も堆積する。

## 第5章 調査成果のまとめ

### 1. 既往の調査と今回の調査成果

平成24・25年度調査の成果と今回の調査成果について関係する部分について報告する。

以下は、小都市教育委員会2015『横限山古墳』小都市文化財調査報告書第289集 第5章まとめ から古墳の規模および築造方法、周溝についての記載を抜き出して再録した（下線は今回加えた）。

平成24・25年度に実施した確認調査によって、横限山古墳は後円部径23.1m、くびれ部幅9.6m、前方部端は崩れているため正確な値は不明ながら長さ10.5m、最大幅11.4mの規模を測ることが明らかとなった。各トレンチの土層観察の結果から、墳丘は旧表土上に構築されており、この旧表土中やその下位には弥生時代中期の遺物が包含されている。墳丘周囲にはややいびつな形状を呈する周溝が確認されており、前方部北側では幅約7mの規模と考えられた。前方部西側では、緩やかなスロープ状のテラスが広がっており、墳頂から周溝にかけて緩やかに移行するために、周溝上端の判定が難しい。このテラスと周溝は旧表土上および地表面から掘削・整形される。

周溝プランは全形が不明であるが、盾形状を呈するものと考えられる。限られた範囲の調査ではあるが、周溝内部に土器供獻は確認できなかった。埋土は墳丘盛土と同質で、ややしまりが弱く、墳丘流出土が堆積しているものと考えられる。流水や滯水の痕跡は確認できなかった。

今回の調査では、墳丘範囲での確認調査は実施しておらず、横限山古墳の墳丘規模については新しい成果はない。平成24・25年度調査で墳丘の周囲に想定されたテラスや周溝については、これまでの調査と異なる成果が得られた。

ただし、既往の調査の再確認・整理を進めていくなかで、横限山古墳の規模について修正が必要となった。

横限山古墳は、主軸は北北西—南南東方向で、主軸方向で全長が31.9mとなる。後円部墳丘はやや東北東—西南西に広がりを持ち、20.13m×(23.25)mの規模で、前方部は長さ11.77m、幅はトレンチで確認した前方部墳頂を基準とすれば11.16mである。

### 2. 周溝の有無とテラスについて

まず、周溝の有無についてであるが、平成24・25年度調査において、古墳北側から西側のトレンチで周溝が想定されたが、トレンチ3やトレンチ7では周溝の存在がはっきりしていなかった。

令和元年度調査では、平成24・25年度調査トレンチを踏襲したトレンチ1、トレンチ2、トレンチ7、トレンチ8や新しく設定したAトレンチでの古墳周溝の確認は出来なかった。そのため、小都市の複数の職員で土層について確認する機会を持ち、これまでの調査では周溝埋土と判断されていた土層について、地山として判断できるという見解に修正する。

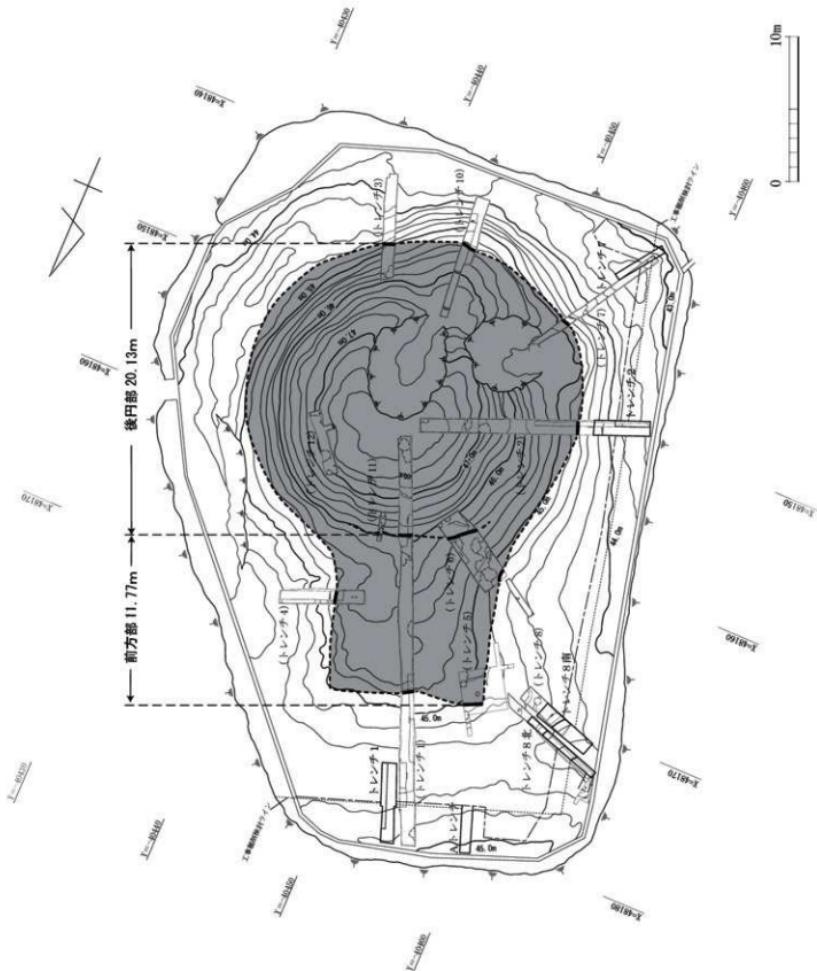
平成24・25年度調査で周溝が想定されたトレンチ土層を再確認すると、想定された周溝の上位には旧表土・旧表土系土層が確認できるので、墳丘構築と違う時期の堆積であるし、地山に類似する土壤でもある。

なお、トレンチ8については、溝状遺構がみられたが、溝状遺構は旧表土や旧表土系の土層の下位にあり、古墳築造以前の溝であることが考えられる。出土遺物からも、溝内からは弥生土器や弥生土器に類似した焼成の小粘土塊が出土しており、旧表土の上位層、墳丘からの流入土からは埴輪片の出土が確認できた。古墳築造前の溝状遺構は、丘陵頂部のピークが南北に分かれる部分があるが、その間に向かっての溝状遺構となっており、想定される弥生時代集落に伴う丘尾を切断するような溝や道状遺構の可能性が考えられる。

次にテラスの有無である。

平成24・25年度調査で想定された古墳周溝と墳丘の間の緩やかな傾斜面がテラス部と想定された。先に説明した通り、横限山古墳の明確な周溝（埋土）は確認できない。テラス面の成形については、新たな知見は得られていない。墳丘裾部については、平成24・25年度調査の成果が基準であり、それを基に修正を行い、第7図の墳丘復元図とした。

以上のことから、横限山古墳は周溝を持たない。テラス面については、これまでの調査から明確な切土（カット）が確認できないので、丘陵頂部を活かした形で旧表土上に盛土を行い、古墳を築造したと考えられる。切土（カット）が行われた場合も盛土範囲を超えることはなかった（テラス面として明瞭にみられるることはなかった）と考えられる。



第7図 横限山古墳墳丘復元図 ( $S = 1/300$ )

### 3. 市指定文化財（史跡）の指定について

横隈山古墳は昭和 48 年のみくにの東団地造成の際に発見され、市民を中心とした保存運動がかつて行われて保存された記念碑的な遺跡である。平成 30・31 年度に行なった公園整備（防災工事）後に改めてその存在やこれまでの保存に至る経緯を周知すること、恒久的な保存を表明するために、令和 3（2021）年 11 月 25 日に、小郡市指定文化財（史跡）の指定を行なった。

以下が横隈山古墳の内容、評価と指定理由である。

#### （1）墳形・規模

墳形は、前方部が狭く短い前方後円墳である。規模は、全長 31.9 m、後円部径 20.13 m × (23.25) m、前方部長 11.77 m、前方部幅 11.16 m 前後を測る。（規模については最新の成果に修正した）。

#### （2）主体部

主体部は盗掘により、原状を留めない。過去に石材が見つかった記録があるが、平成 24・25 年度の調査では、石材を始め、主体部の内容を推測させる痕跡は確認できなかった。古墳の規模や時期から考えると、本来は石棺系石室であった可能性が指摘される。

#### （3）出土遺物

これまで墳丘で多くの埴輪が表採されており、確認調査でも多くの埴輪片が出土した。種類は、円筒埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪、蓋形埴輪である。なお、後円部墳頂付近には、円筒埴輪列が巡る。

#### （4）評価および指定理由

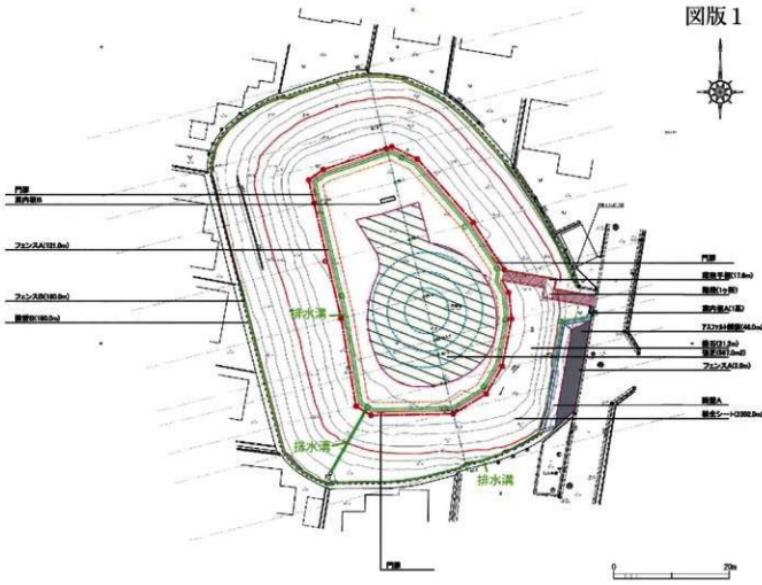
津古古墳群に始まる当地域の首長墓系列は、4 世紀後半の三国の鼻 1 号墳の後、一度西島丘陵に移り（花賀古墳群）、再び横隈山古墳へと続く。これ以降大型古墳は築造されず、三国丘陵最後の首長墓と言うこと也可能である。

主体部が不明瞭なこの古墳において、その評価に重要な役割を果たすのが埴輪である。円筒埴輪には口縁部を外側に屈曲させるものがあり、これは朝倉地域の古墳（堤当正寺古墳・古寺 1 号墳）などにも見られ、つながりが想定される。

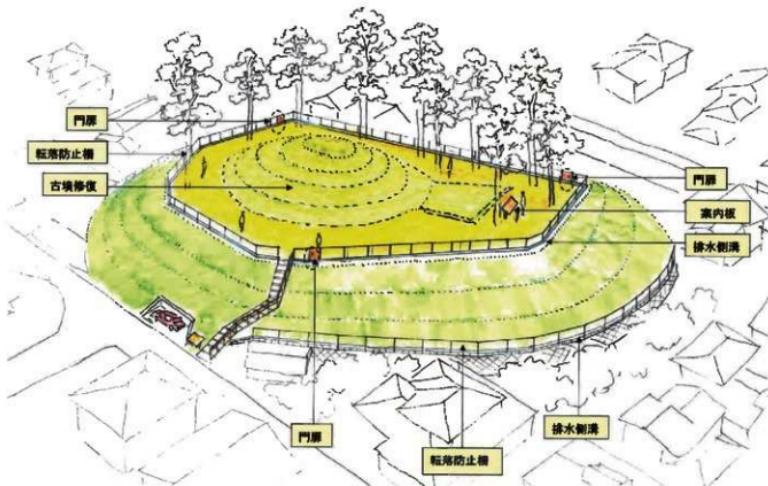
また、この古墳を評価する上で、三沢蓬ヶ浦遺跡で検出した埴輪窓を忘れてはならない。この埴輪窓からは片流れの家形埴輪が出土し、胎土は完全には一致しないものの、調整方法などから両者のつながりが指摘される。埴輪窓は九州では貴重で、5 世紀中頃の古墳と埴輪窓のセット関係は、最古級の例となる。

横隈山古墳の築造時期は、5 世紀第 2 四半期から第 3 四半期が考えられる。埴輪窓から出土した片流れの家形埴輪からは倭王權との密接なつながりが想定され、近接する横隈鍋倉遺跡 2 地点で検出された初期横穴墓からは朝鮮半島との関係が推測される。これらは、激動の 5 世紀にこの筑紫平野北端を治めた横隈山古墳の被葬者が、地域のみならず、北部九州社会全体の中で、重要な立場にあったことを物語っている。

図版 1



横隈山古墳公園整備工事図面 (S = 1 /750)



### 横隈山古墳整備イメージ図

図版2



横隈山古墳遠景整備後（現在）（南東から）



横隈山古墳調査時（令和元年度）の航空写真（北東から）

図版3



トレンチ1  
(北西から)



A トレンチ  
(東から)



トレンチ2  
(北から)

図版4



トレンチ8 北・南  
(東から)



トレンチ8 北・南 溝部分  
(北東から)



トレンチ8 北・南  
溝部分掘削状況  
(東から)

図版5



横限山古墳全景  
(北東から)



横限山古墳全景  
(南南東から)



横限山古墳全景  
(上空から)

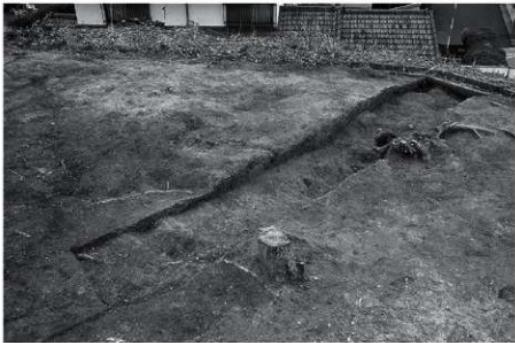
図版 6



トレンチ 1  
(南西から)

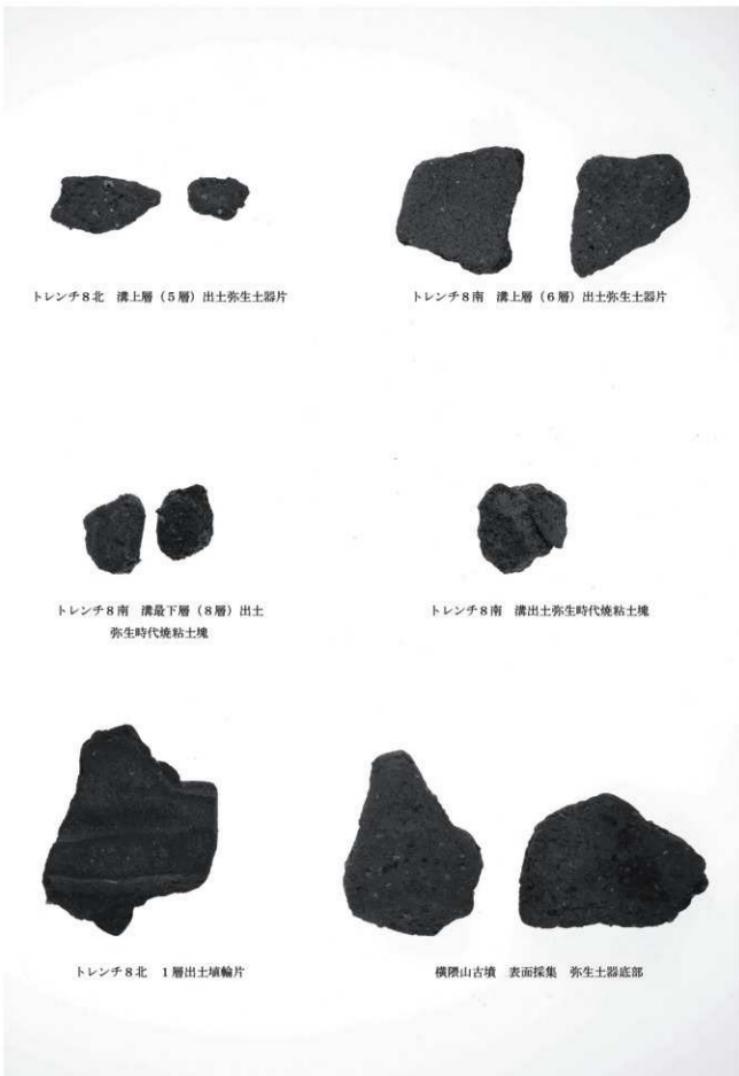


トレンチ 2  
(北西から)



トレンチ 7  
(北西から)

図版7



図版8



横隈山古墳 表面採集 墓輪片（表）



横隈山古墳 表面採集 墓輪片（裏）

報告書抄録								
ふりがな	よこぐまやまこふん							
書名	横隈山古墳2							
副書名	横隈山古墳公園整備工事に伴う調査							
巻次								
シリーズ名	小都市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第351集							
編著者名	山崎 賴人（編集） 柏原 孝俊							
編集機関	小都市教育委員会 小都市埋蔵文化財調査センター							
所在位置	〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5147-3 TEL0942-75-7555							
発行年月日	令和5年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
横隈山古墳2	福岡県 小郡市 三国が丘	40216		33° 26' 00"	130° 33' 54"	2019.11.26 ～ 2019.12.23	202.5 m <sup>2</sup>	公園整備 (防災工事)
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
横隈山古墳2	古墳	古墳		古墳		埴輪 弥生土器		

横隈山古墳は昭和48年、平成24・25年度に調査が行われている。平成24・25年度には測量調査及びトレンチ調査によって、墳形や規模、構造を確認した。令和元年度の調査により、想定されていた周溝の有無について確認した結果、周溝（遺構）ではなくて、旧地形による傾斜と判断した。トレンチ8では、溝状遺構を確認したが、旧表土の下位にあり、古墳に伴うものではなく、それ以前の所産で、弥生時代の集落に伴う溝である可能性が考えられた。

